

不完全「サルヴルサン」療法が再歸熱の病型 に及ぼす影響に就て

・ 研究員 山 下 朝 橘

〔京都帝國大學化學研究所及皮膚科教室（松本教授）〕

再歸熱に関する研究は、1873年に Obermeieri 氏が再歸熱の病原體を發見し、次で Gabritschewsky, Metschnikoff 等は免疫及治療血清の研究を公表した。其後再發の病理に就き、或は再發株の免疫生物學的關係に就き幾多の業績が發表された。演者も原株より誘導した13種の後續再發株の免疫生物學的關係に就き數回に亘つて公表した（「ルエス」第15卷1號より第16卷1號を参照）。

然るに此等の研究は免疫學的研究のみで、再發株の感染力即ち毒力に関するものは極めて少數に過ぎない。再發株の毒力を検討することは免疫學上興味あるばかりでなく、延いては治療學上極めて重大なる意義を有するものと考へらる。

曾て Ehrlich は、原蟲屬に於ては其發育階級形の少數なるものは、當該する免疫性を獲ること容易であるが、然し其多數なるものに於ては困難なることを説き、且各階級に於ける發育形は各々其毒性の異なることを論及して居る。即ち「トリパノゾーマ」感染家免は發育形少數なるが故に、これに對して生じたる對抗素は治療的に影響すること大であるが、これに反し發育形の大いなる「マウス」に於ては對抗素は影響することなく、更に進んで再發形を形成すと述べて居る。尙其「サルヴルサン」療法は病菌の血清不過敏とならざる中行ふを可とすと述べた。又微毒の「サルヴルサン」治療の實際に於ては、第二期微毒は第一期に比し遙かに多量の「サルヴルサン」を用ゆる要があることは屢々遭遇することである。楠氏は再歸熱の「サルヴルサン」治療は、可及的に而も血中に「ス」の少數なる時期を選む可しと。其外秦、中澤、田中、加藤、黃の諸氏は、實驗的再歸熱の種々の時期に於て「サルヴルサン」治療を行ひ、其治療量に就て述べた。

演者は前回の講演會で、脊髓癆患者の再歸熱療法の際、再發株を接種して原株接種の場合と同程度の病型を得るには、原株接種量の約4倍以上を要することを述べた。此の事實は原株と再發株とは其感染力に於て差異あることを考へしめる。今回は各株接種「ラツテ」を、種々の

時期に一定量の「サルブサル」を以て治療し、其不完全治療が再歸熱の病型に如何なる影響を來たすかを觀察した。即ち「サヴィオール・ナトリウム」1%水溶液を「ラツテ」體重100gにつき1.0 ccmの割合に1回注射した。注射の時期は豫防的、潜伏期、發病初期の3期とし、尙對照として「サルブサル」治療を施さざるものに於て自然経過を觀察した。接種量は1.0 cmm中10000の「ス」浮游液を「ラツテ」體重100gにつき1.0 ccmの割合を用ひたる群と、其 $\frac{1}{2}$ 量を用ひたる群とに分ちて觀察した。

實驗結果を總括すれば、各株接種「ラツテ」の自然経過に於ては夫々病狀の差異が認められる。即ち原株接種「ラツテ」に於ては、再發回數が多く且初發作終熄後短時日に第1再發があり、尙潜伏期は再發株接種「ラツテ」のそれよりも短い。

「サルブサル」治療後の病狀を比較すれば、各株接種「ラツテ」共些少の差異を認め得た。即ち原株接種「ラツテ」の潜伏期は再發株接種「ラツテ」の潜伏期よりも短く、且全経過中に於ける再發回數は原株接種「ラツテ」の場合が多い。尙原株接種「ラツテ」に於ては「サルブサル」注射後短期間に血中より「ス」の消滅を見るが、再發株接種「ラツテ」の場合は比較的長期に亘つて連日小數の「ス」を血中に證した例が多い。

以上は本實驗の概要であるが、之を以て直ちに各株「ス」の「サルブサル」抵抗力を云々するは至難の事と云ふべし。然し不完全「サルブサル」療法が再歸熱の病型に及ぼす影響、即ち潜伏期、再發回數、血中より「ス」の消滅期間等を併せ考ふれば、原株と再發株とは免疫生物學的性質を異にすると共に、且又其感染力に於ても差異あるものと考へられる。尙詳細は日本黴毒學會雜誌「ルエス」、第17卷、第1號に於て發表す。

(終始御懇篤なる御指導を賜つた松本教授に深謝す)